

Sport
Godzilla®

スポーツ ゴジラ®

第61号

特集

スポーツの
これからを考える



無料



スポーツ振興くじ助成事業

Sport
Godzilla®

スポーツゴジラ®

〔第61号〕

「ゴジラ」は東宝株式会社の登録商標です。
『スポーツゴジラ』は、日本スポーツ学会が
商標使用の許諾を受け、スポーツネット
ワークジャパンが発行しています。

- 2 | 第61号を発刊するにあたり 長田 渚左
- 特集■
- 「スポーツのこれからを考える」
- 4 | エンジョイ・ベースボールと成長至上主義 取材・構成
首藤 正徳
長田 渚左
— 森林貴彦 慶應義塾高等学校野球部監督
- 17 | 慶應義塾高等学校野球部 部訓
- 18 | 新しいスポーツから見たオリンピック 構成
荻島 弘一
- 29 | これからの日本のスポーツを考える 構成
阿部 雄輔
— 芦立訓 日本スポーツ振興センター理事長
- 38 | 『走』第8回 玉木 正之
好きこそものの上手なれ。「走るプロ」は「走ること」が大好き!
- 39 | 夢劇場『馬』No.33「至福のとき」 長田 渚左
- 40 | バックナンバーのご案内

南 伸坊 表紙のつぶやき 「AIが自動運転をするようになると、運転自慢をする場所がなくなる。これからは教習所がドライビングテクニックを、思う存分、自慢できる、スポーツ施設になるだろう。表紙は昔の力自慢。」

スポーツネットワークジャパンHP <http://sportsnetworkjapan.com/>
バックナンバー第43号～58号はホームページからもお読みいただけます。

『スポーツゴジラ』は、種目を問わずスポーツそのものの魅力や
価値を語るスポーツ総合誌（フリーペーパー）です。

第61号を発刊するにあたり

編集長 長田渚左



2022年2月24日に始まったロシアのウクライナへの軍事侵攻は、いまだ停戦に至っていない。泥沼化する戦況に心を痛めていたら、イスラエルとパレスチナの衝突で中東情勢まで悪化して、今も犠牲者の数が増え続けている。

国家や人種間の争いをなくすにはどうすればいいのか？と考えて、前回60号で『今こそスポーツ国際交流』を特集し、イスラエルとパレスチナの子どもの柔道を通じた国際交流を伝えたばかりだっただけに、本当に辛い。同じ畳の上で練習した子どもたちが、今も元気でいることを祈るしかない。

本誌では「平和のためにオリンピック・パラリンピック休戦を……」と訴え続けてきた。しかし、北京冬季パラリンピック開幕直前にロシアは軍事侵攻

を開始。肥大化したオリンピック自体も、利権がはびこり、汚職や談合などの不正事件でイメージが悪化。以前のように気安く「休戦を」と呼びかけづらい空気になった。

それでもスポーツには、私たちの想像以上に、人と人、国と国を繋ぎ、平和と共存への道を切り開く可能性があるかと確信している。

そこで今回は新しいスポーツの若いアスリートを招いてシンポジウムを開催した。また今夏の全国高校野球で優勝した慶応義塾高校野球部の森林貴彦監督にチーム伝統の『エンジヨイ・ベースボール』の神髄を語っていただいた。さらに日本スポーツ界で大きな役割を担うJSC（独立行政法人日本スポーツ振興センター）の理事長に公募で選ばれた芦立訓氏にはスポーツの未来についてお話しいただいた。

今だからこそスポーツの真の力、可能性を噛みしめたい。

ご協賛およびご協力企業・団体



WOWOW



人と社会を支える力



文藝春秋

上月財団



MS&AD



三井住友海上



JAPAN SPORT
COUNCIL

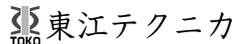


JMOPE 日本女子体育大学

株式会社東美物流



公益財団法人
住友生命健康財団



株式
会社 産経映画社

SPN
Security Protection Network

(順不同)

特集 スポーツの「これから」を考える

成長至上主義 エンジョイ・ベースボールと

取材・構成 首藤正徳

協力 長岡裕左
渡辺一寿



慶応義塾高校(神奈川)が、今夏の甲子園大会で107年ぶりの優勝を果たした。選手たちは高いレベルの野球を笑顔で楽しみながらプレーして、チーム伝統の「エンジョイ・ベースボール」を大舞台で見事に実践してみせた。森林貴彦監督(50)に優勝までの戦いを振り返ってもらいながら、「エンジョイ・ベースボール」の真の意味、指導者としての信念、目指す野球について聞いた。



森林 貴彦 (もりばやし たかひこ) 1973 (昭48) 年6月7日、東京都生まれ。慶応義塾高校時代は野球部で遊撃手。慶応義塾大学進学後は学生コーチとして慶応義塾高校で指導。卒業後に就職したNTTを3年で退社。筑波大学院に進学してコーチングを学び、教員免許も取得して慶応義塾幼稚舎の教諭になる。12年に慶応義塾高校の助監督、15年8月に同校監督就任。18年春に9年ぶり選抜大会出場。同年に10年ぶりに夏の甲子園出場を果たし、23年夏に同校107年ぶりの全国優勝に導いた。

——今年の夏の甲子園大会で慶応高校は107年ぶりに優勝しました。選手たちの笑顔とチーム伝統の「エンジョイ・ベースボール」の合言葉が、実によくマッチして、見ているこちらにも楽しませていただきました。監督にとつてはどんな夏でしたか。

森林 準備期間を含めると県大会から甲子園まで約2カ月、暑くて、長かったです。でも楽しくて充実していた夏ですかね。甲子園の決勝まで県大会から12試合ありましたが、試合の合間の日々、準備の時間も含めて、記憶に深く刻み込まれるような、濃密な時間を過ごせたと思っています。

——監督は3年前に『Thinking Base ball』（シンキングベースボール）（東洋館出版社）を出版されています。その中でより高いレベルの野球を楽しむことを「エンジョイ・ベースボール」と定義され、選手一人一人に自ら考えさせることで、自主性、主体性を導き出すという考えをすでに書かれています。この夏はそれをほぼ100%実践

されたのではないのでしょうか。

森林 今回は結果としては優勝という最高の形で終われましたが、自分の目指すチームづくりが100%できたということはありません。まだまだ私が主導してしまつて、選手にもっと主体的に動いてほしいかつたところもありますし、もつと選手の力を引き出せたんじゃないかなど、いろんなことを考えると7〜8割といったところですかね。

——まだ満足していない2〜3割は何でしょう。

森林 試合の中で「こうすれば良かった」という後悔はほぼありません。ただ試合に向けた準備や、練習内容、練習での選手の動きなどを振り返ると、もつと改善できた点がありました。例えば大阪入りしてから、猛暑の中で1日4時間くらい練習したのですが、選手には負担が大きくて疲労がたまつたところがありました。練習の中身も選手のやりたいことをもう少し聞き出して決めればよかつたとか……。主に練習ですね。試合はこれまでの積み重ねを思い

切り出し切るだけ、日々の練習の方が大事だと選手にも日ごろから言っていますから。

——その猛暑の中、甲子園で5試合を戦いました。今振り返って調整面などで難しかったり、きつかったことはありましたか。

森林 精神的な部分と肉体的な部分で分かれませんが、精神的には8月11日の初戦（2回戦）の北陸高校との試合です。試合が大会6日目でした。もちろん日本一を目指していましたが、春の選抜は初戦で仙台育英に負けていて、まずは一つ勝ちたいという気持ちが強かったので、練習しながら待つ日々は精神的に一番きつかったですね。身体的には決勝の前くらいまでの日々。選手たちは精神的にも肉体的にも疲労がたまって、かなりきつかったと思います。

主体性がベンチを超えた

——そんな中でも、非常にレベルの高い野球を、実に楽しそうに生き生きとプレーしている選手たちの

姿が印象に残りました。自分たちで考えて、主体性を持ってプレーする「エンジョイ・ベースボール」をまさに実践されていたのだと思いますが、その真価が発揮された、記憶に残る場面はありますか。

森林 いくつかあります。例えば3回戦の広陵高校戦の初回到1番バッターの丸田湊斗（3年II外野手）が出塁して、1アウト2塁になってから3塁への盗塁を決めた場面です。

広陵高校の2年生の高尾響君が好投手だったので、打つだけでは点が入らない。攻略するには2塁から3塁への盗塁にチャンスがあるということで、ホテルの宴会場で映像を何度もスクリーンに映してみんなでタイムイングを研究しました。そして試合の中盤以降に2塁に行ったら3塁を狙おうという話をしたのですが、丸田はいきなり初回到3盗しました。

あれはサインではありません。勝手に走ったんですね。「行けると思ったんで行きました」と。私には初回到3盗のサインを出す勇氣はなかったですね。

選手の判断力と勇気がベンチを完全に超えていた。「すげえなあ」と思いました。尊敬しましたね。

初回到3盗されるといのは守備側としては研究されているか、無警戒かのどちらかです。初回から相手に研究されているというのが分かったわけですから広陵高校のダメージはかなり大きかったと思います。ただの盗塁ではない意味があるプレーで、まさに選手の主体性が凝縮された場面でしたね。

——一般的に、高校野球では盗塁は監督のサインで走るのでですか。

森林 チームにもよりますが、1塁から2塁への盗塁は「この球で」という時と「あなたが出塁すればいつ走ってもいい」という時の2パターンが多いです。ただ3塁への盗塁に関しては、成功率はだいぶ下がりますし、得点圏の2塁にただで1ヒットで帰ってこられるので、基本的に無理して走る必要はないんです。勇気と決断力、自分なりの確信がそろわなければ、なかなかできないです。

——ほかに監督が予期しなかったプレーはありましたか。

森林 大会を通じてセカンドのキャプテンの大村昊澄（3年）とショートの大木陽（3年）の2人の守備が非常によかったのですが、特に記憶に残っているのが、初戦の北陸高校戦でセンターに抜けそうなボールを追いかけていた八木が、2塁ベースに当たって変化したボールに、とっさに反応して捕球してアウトにしました。あんなプレーは今まで見たことがないし、一般的にもほとんど生で見る機会もない。びっくりしましたね。

仙台育英との決勝戦での初回の丸田の先頭打者ホームランもそうです。相手は湯田統真（3年）君という好投手で、球種は真つすぐとスライダーのほぼ2種類なんです。真つすぐは球速150キロくらいなので狙っても簡単には打てないだろうということ、スライダーを狙つていこうという話は試合前にしていたのですが、よくぞ初回の第1打席にドンピ

シヤで芯に当ててくれました。初回先頭打者ホームランは夏の決勝では史上初だったようですが、全然知りませんでした。

あとはプレーではないのですが、試合中の選手たちの表情ですね。私は「笑顔でやろう」とはひと言も言っていない。こんな大きな舞台でやらせてもらっているんだから、いい顔をして野球をやろうねという話をしていた程度でした。それが選手たちは試合中にも無理につくっているわけではない笑顔を見せて、本当にその瞬間を味わうという感じのいい顔をしていました。非常に贅沢なスポーツの楽しみ方をしているなと思いましたね。

—— 緊迫した場面やピンチも多かったと思うのですが、ベンチから見ても選手が野球を楽しんでいるなという感じが伝わってきたんですね。

森林 甲子園の高校野球は負けたら終わりですので、どうしても勝利へのプレッシャーや「打たなきゃ」「勝たなきゃ」といった気持ちが入り込んでしまいま

す。そうすると選手たちもどうしてもこわばった表情になってしまうのですが、ウチの場合は「こんな大舞台で野球ができてうれしい」「感謝」みたいな気持ちの方が上回っていたと思うんですね。だから自然とあんな表情になっていったんだと思います。

瞬間、瞬間を味わう

—— そうですね。試合中にピンチの場面で選手たちが集まって、笑顔で空を見上げるシーンも目にしました。あれは効果がありそうでしたね。

森林 そうですね。あれも心のトレーニングの一環でやるように心がけていました。苦しい場面やピンチになったときに、空を見て、ちよつとした現実逃避じゃないですが、一度気持ちを別のところに行かせるから、「やること何だっけ」と冷静になって考えました。そのために一回空を見ようということはやっていました。その学んできたことを、よくぞあんな場面で選手たちはやっていたなあと思いますね。

——勝ち上がっていくにつれて、OBや周囲から優勝への期待が高まってきました。監督ご自身の「勝たなければ」というプレッシャーはどうでしたか。

森林 もちろんありました。正直に言うと二つの感覚がありました。一つはやはり勝負事ですから当然勝ちたい、勝たなきゃ、ここまできたら負けたくないという感覚。もう一つはその瞬間瞬間を味わうという感覚。楽しむという感覚です。楽しむという表現は日本人的には「楽（らく）」という文字が入ると、どうしても「楽しむんじゃないよ」と思われる方もいますので、やはりスポーツの醍醐味をその瞬間瞬間で味わうという感じですね。ですから、「どうしても勝ちたい」という気持ちが心のど真ん中にあつたわけではないですね。

——監督人生で甲子園で優勝するチャンスなんて、そうあることはありません。仙台育英との決勝戦はまさに千載一遇のチャンスでした。「何としても勝ちたい」という気持ちで臨んだのではないですか。

森林 「何としても勝ちたい」がど真ん中にはきていませんね。メンタルトレーニングで「結果は出すものではなく、出るもの」ということをずっと学んできました。ですから、やることはやってきた。その結果が2時間半後に出るので、それが勝ちだったらいよいよねという感覚で選手たちも私自身もずっとやってきたから。勝利という結果だけを求めてやっていると試合中ずっと苦しいんですよ。野球だけではなく、どんなスポーツも同じだと思います。ですから今できることを積み重ねて、試合に臨んで終わったら勝っていたみたいなの、そういう心境で毎試合やれるようになっていました。

——仙台育英との試合中の心境はいかがでしたか。
森林 最後の4イニングは8―2でリードしているんですよ。早く終わらないかな、残りのイニングを0点で抑えて優勝したいという気持ちももちろんありました。ですが一方では決勝という舞台で、この大観衆の中で、仙台育英という最高のチームと野球

をやっている、勝つても負けてもこのチームでは最後の試合になるわけですから、何とかずつとやっていたいなあとという気持ちもあつて、両極端の感覚が混じり合った不思議な感じでしたね。

10個から2個へ

——決勝戦の前に監督がかかげたスローガンは「大願成就」でした。初戦は「破顔一笑」、準々決勝は「勇往邁進」と、試合ごとにスローガンを4文字熟語で表現されていました。

森林 5年前に夏の甲子園に出場したときも県大会からやっていました。ここ数年はあまりやれていなかったのですが、今年の県大会の準々決勝から「今年もやろう」とひらめいて再び始めました。試合前日か前々日のミーティングで選手たちに告げるのですが、それを考えるのにだいぶ時間を使っています。——試合後などの監督のコメントも実に自然体で心に響いてきました。表現すること、伝えることを

非常に重要視されていますね。

森林 高校の野球部の監督だったり、小学校の担任だったりすると、何を言ったかよりも、伝わったかが重要なんです。言うだけなら自己満足なんです。でも例えばミーティングで言いたいことを5個も10個も言っても、受け取る側はそんなに言われても分からないよとなる。だから言いたいことは10個あるけど、絞って2個にしようとかを常に考えています。いかに言うかではなく、いかに伝えるか。そのためには言葉を選ばなければならぬし、言葉の量や順番、口調もすごく大事になります。なるべく凝縮させて聞きやすいように心がけていますが、まだまだ磨いているところです。

——野球部の部訓も読ませていただきました。内容が実に素晴らしくてユーモアがある。これは前任の上田誠監督が中心になってつくったものだと聞きました。手直しもされたように感じたのですが。

森林 私は上田先生が監督に就任された時の1期生

なんです、25年監督をされていて、その中盤くらいに原案をまとめられたと記憶しています。その当時、私はコーチとしてお手伝いしていて、その後、助監督を経て2015年に監督になったのですが、部訓には100%共感していたので、そのまま使わせて下さいとお願いして、ホームページに載せています。時代的に修正しなければならぬ表現などは手直しましたが、基本的には変えていません。

——「自分の評価は自分でしろ。人の目、人の評価を気にしてばかりいるとパイプが詰まる」という部訓が気に入ったのですが、この「パイプが詰まる」という表現が実にいいですね（笑い）。

森林 これも上田先生がつくったものですね。面白と思いますし、いい表現をするなと感心します。私では書けないこともたくさんあります。

——これからのスポーツは結果を出すだけではなくて、何を語り、伝えていくかも非常に重要になってくると思いますね。

森林 そうですね。スポーツにかかわってきた人たちは、基本的にみんなスポーツは価値があるものだと思いますが、なかなか言葉にできていません。だから「何がいいの」と言われた時にうまく伝えられていないと思うんです。なのでこれからスポーツの価値、存在意義みたいなものをますます高めていくためには、特に指導者レベルがしっかりと伝える努力をしていかなければならないと思っています。

スポーツマンシップと人間の徳

——部訓には「相手の好プレーには拍手を送ろう」という言葉もあります。昨秋の県大会ではファウルフライを慶応高校ベンチ前で捕球した相手捕手に、慶応高校の選手がいつせいに拍手したシーンもありました。今のスポーツ界は勝利至上主義の傾向も強いです、監督はお互いを尊重しながらフェアに戦うスポーツマンシップをとっても大事にされています。**森林** ふだんからスポーツマンシップについては講



師を呼んだり、テキストから一部抜粋してミーティングで話したりして、選手たちに徹底しています。確かにスポーツが勝利至上主義になって、勝つために手段を選ばないという方向に行くと、どうしてもスポーツマンシップとぶつかってきます。高校野球で例を挙げると、サイン盗みなどです。ばれないように相手のサインを盗んでも勝つ。でも私たちは勝つということ以上に勝ち方にこだわる。スポーツマンシップを大事にしながら勝つということが、私たちの勝ち方だと思っています。

——監督は著書でスポーツマンシップこそが現代を生きる人の土台になるイメージだと語っています。
森林 スポーツマンシップと言うとスポーツで得られるものだと思うのですが、社会全体にとって必要なもので、人間の徳とか人間性の根幹になる部分だと思います。それは教室での授業だけではなく育ちにくくて、スポーツで養うと、より得やすくなると思っています。野球をやって高い技術

や丈夫な体を身につけましたということと同じくらい、いやそれ以上にスポーツマンシップを養いましたというのは、これからの社会を生きる人間にとって重要なことだと考えています。

機会と交流

——ところで今年の慶応高校野球部の部員数は3学年で106人います。高校野球の大きな大会は基本的にトーナメントですが、リーグ戦にも参加されるなど、多くの部員に試合出場の間機をつくる工夫もされているようですね。

森林 野球強豪校と比べると部員のレベルもバラバラだと思えます。全国で実績をつくって入ってきた部員もいれば、慶応の小、中学校から上がってきた部員、一般受験で入ってきた部員もいます。それぞれのレベルの部員に野球をやったぞ、試合で頑張ろうと思うてもらうために、例えばAチームは試合、Bチームは遠征試合というふうに、土日で4試合ず

つ8試合やるのを基本としています。練習もグループ分けして手伝いだけで終わる一日にならないような環境づくりは腐心しています。

あと秋春夏のトーナメント大会と並行して、神奈川県でリーグ戦を立ち上げました。実質去年から始まったのですが、今13校が参加しています。準公式戦と位置付けて、特に上級生や秋の大会まで背番号を付けていない部員が、背番号も付けて学校の代表として試合に出場しています。

——選手同士の交流も大切に行っているそうですね。
森林 高校野球は選手同士の交流が意外とありません。試合が始まる時に一礼してあとはほとんど話がない。これはもつたいないなと昔から思っていたので、リーグ戦では試合後に一緒に昼食を食べながらミーティングしたりしています。そうすると「オレの変化球どうだった」とか「あのスライダーよかったよ」とか話をするわけです。それから、ふだんどんな練習をしているとか、○○は禁止なのかな

ど、うち解けているんな話題に広がっていく。

昔は公園に子どもが勝手に集まって野球をしていましたが、今はすべて習い事化して、子どもたちは大人がお膳立てして準備した場所で育っている。だから自分たちでコミュニケーションをとりながら交流できる場をつくってあげたいと思っていました。

シーズンオフには複数チームが集まって、部員も指導者も一緒にオンラインでスポーツマンシップを学ぶということもやっています。選手も指導者ももつともつと成長しようというのが大前提なんです。だから私は勝利至上主義に対して、成長至上主義というのを掲げてやっていきたいと思っています。

価値と理想

——話は甲子園に戻りますが、すごく暑い夏でしたが、慶応高校は体調を崩す選手はいなかったように思います。どんな暑さ対策をされていたのですか。

森林 熱中症対策は表面よりも体の深部を冷やすこ

とが重要という医学的知見も出ていますので、選手たちは練習からアイススラリーというシャーベット状の飲料を飲んでいました。胃腸を通して、深部体温を下げてくれます。暑くなつてからより、ウォームアップ時点で飲んだ方が、深部体温が上がりにくくなるんです。クーリングタイムにも飲んでいました。おかげで2カ月間で熱中症はゼロ。コンディション管理はうまくいきました。

——近年は地球温暖化による夏の気温の上昇もあり、選手や観客の健康管理上、開催時期を疑問視する人も多く、朝夕の二部制を推す声など、さまざまな意見が出ています。そこはどうお考えですか。

森林 そうですね。特に今年の夏は一日も涼しい日がなくて、ずっと気温35度以上という中でやっていましたから練習と休養のバランスがすごく難しかったですね。実際に甲子園で試合をして、高校野球の目標とすべきいい場所だとは思いましたが、メディアを中心にここを聖地にしてしまったために、甲子

園から離れられなくなっています。

例えば二部制にしても午前中1試合、夕方から1試合の一日2試合が精いっぱいでしょう。そうなる消化できないので、私はいろんな球場を併用して、日程にも余裕を持たせて、リーグ戦を何試合かやって、上位が甲子園でトーナメントに臨むような形式でもいいと思っています。大阪ドームを活用すれば暑さもしのげます。

何より全国からあれだけいいチームが集まって、1週間待って1試合で帰るのは本当にもつたいない。負けたチーム同士のトーナメントや、試合以外で交流の場をもっと設けてもいい。高校野球はどこでやっても価値があります。甲子園でなければ意味がないとは思っていません。

——もう一つ近年深刻化しているのが、過密日程も原因とされる、ひじや肩などの選手の故障です。この対策についてはいかがですか。

森林 突発的なケガはスポーツの性質上避けられま

せんし、成長するためには自分の限界を超えていくという部分もあるので故障のリスクもあります。ですので、その予防のために選手のコンディションを個々に管理することが重要だと思っています。グラウンドでの会話や動きだけでは追い切れないので、ウチはコンディション管理用のアプリを入れて、毎朝必ず体重、体調、特に肩、腰、ひじの違和感、全身の疲労度などを入力して、スタッフが閲覧できるようにしています。あと信頼できるドクターと関係を構築して、部員が故障したときには、いくつかの病院を紹介できる形にしています。

——ところで監督は慶応幼稚舎の先生と、高校野球部の監督の二刀流です。2つの異なる世代を指導することでメリットになっていることはありますか。

森林 今は午後3時からいまで幼稚舎で3年生の担任をして、4時くらいから野球部の練習に参加しています。小学生を見てから、高校生を見ると、高校生がとて大人に見えます。体は大きいし、意志は

強いし、計画も立てられる。なんて立派なんだと思います。高校の先生をしている監督が、よく部員のことを「子どもたち」と言ってますよね。私はそれにまったく賛同できなくて、全然子どもじゃないんですよ。私は50歳で確かに部員と年齢差があります。本当に対等で、こっちの方が少し経験が多いから伝えるよというスタンスですね。

——慶応高校の優勝で「自主性」や「考える力」というワードが脚光を浴びましたが、それを実践するのは簡単ではないと思います。高校生は大人とはいえ、レベルも気質もさまざまで、時には厳しく管理して指導する必要もあるのではないですか。

森林 まさにそのさじ加減が指導だと思っています。どうしても二元論になりがちですが、片方だけじゃないですね。全部何でもいいだと放任になって、逆に無責任になります。ウチも自主性とか言われますが、強制してやらせる部分もありますし、厳しい言い方もします。それは選手によっても時期によつて

も変えますし、変えなければいけない。ただ、お尻をたたいてやらせるのではなく、一緒に目標を設定して、一緒に走つて、ちよつと方向がずれたら、こちだぞと修正する。そのバランスを取るのが指導者の腕なんです。

——この夏、ついに全国の頂点に立ちました。監督の中で来年以降はどんなチャレンジになりますか。

森林 同じメンバーで来年もやれるなら、同じような舞台までたどり着きたいという欲が出てくるかもしれないませんが、高校野球は1年で1学年が入れ替わつて毎年振りだしに戻りますし、優勝以上の結果はないわけですから、また新しいチームで試行錯誤しながら、課題を乗り越えていければいいと思っています。「エンジョイ・ベースボール」は理想なので、実現しましたと言えることはきつとないでしょう。それでも、その理想を目指して進んでいく。その繰り返しだと思います。「もう一回」と立ち上がるファイトがあるうちは、監督を続けたいと思っています。

慶應義塾高等学校野球部 部訓

日本一になろう。日本一になりたいと思わないものはなれない

Enjoy Baseball(スポーツは明るいもの、楽しいもの)

礼儀正しくあれ。どんな人に対しても、どんな場にあっても、通用するのは人間性。一人一人の人間性が慶應義塾の評価を決める。挨拶は人との最初の勝負。

自分一人で生きていると思うな。自分一人で野球をやっていると思うな。周りの者に感謝の気持ちを持って。感謝の気持ちは「ありがとう」世の中にそれほど以心伝心はない。言葉は使ってはじめて活きる。

時間厳守。組織が成り立つ、人の信頼を勝ち取る最大の武器。

個と全。グラウンド出たら個人の技術、精神力を高めるための最大の努力をせよ。そして同時にチーム全体の流れ、ムードを考えてプレーせよ。1人1人がキャプテンだと思っているチームのみが勝つ。自分がやって50、人をやらせて50。

他人の悪口を言うものの周りにはいつも悪口ばかり言っている者が集まる。自分の不運を嘆く者の周りにはいつも同じ類が集まる。結果とは関係なく自分のやっている事にプライドを持って。君は誇り高き我慶應義塾の同志だ。

グラウンド、用具は大事に。最後に神様が微笑んでくれる。

闘争心を持って。ただし相手を口で罵倒するような事はやめよう。相手の好プレーには拍手を送ろう。

グラウンドでは上級生、下級生は対等。しかし下級生は上級生に敬意を払い、上級生は下級生に色々と教え、叱り、同時に模範となる練習態度、学業態度を示せ。

理論武装をせよ。君達は将来の指導者だ。子供たちに正しい事を教えるために、ルール、技術論、フォーメーション、勝負哲学、体の構造、医学知識、栄養学、運動力学を知れ。慶應義塾は「身・技・体・学・伝」

返事はただ。広いグラウンドでは大きな声と動作がコミュニケーション。

凡人は習慣で1日を送る。天才はその日1日が生涯である。毎日が本番。大会前だけ盛り上がりあって全国制覇ができるか。泥棒に練習試合はない。

今の自分を許すな。自分のプログラミングが出来ない人間が負ける。

文武両道。カッコイイ生き方をしたいな。

自分の評価は自分でしろ。人の目、人の評価を気にしてばかりいるとパイプが詰まる。

自分がどんなに頑張ってもダメという相手でも、絶対に負けるのを嫌え。勝ち負けの勝負にはとことんこだわれ。負けても淡々としている奴は勝てない。早すぎるんだよ切り替えが。30対0で負けていても逆転すれば世間はそれを奇跡というんだ。自分で自分の逃げ道を作るんじゃねえ。

(コソコソと真面目だけじゃ我慢できない。とことん勝負師)

男は危機に立って初めて真価が問われるものだ。チームもここで点をやらなきゃいいんだろ。最後は勝てばいいんだろ。

雨と風と延長とナイトゲーム、そして決勝戦には勝つ

エンドレス(いつまででもやってやろうじゃないか)

<https://keio-high-baseball.com/philosophy-1/> より

特集 スポーツの**これから**を考える

新しいスポーツから見た オリンピック

司会進行 長田渚左
構成 荻島弘一
写真 山内亮治

オリンピックに新しい風が吹いている。東京大会から追加競技として行われているサーフィンとパリ大会で実施されるブレイキン。若者に人気のある新しい2つのスポーツから半井彩弥(AYANE)選手と上山キアヌ久里朱選手を招き、オリンピックと競技について聞いた。



山口香(やまぐちかおり)1964(昭39)年12月28日、東京都生まれ。東京・都立高島高一筑波大・筑波大学院。筑波大教授。6歳で柔道を始め、13歳の時から全日本体重別10連覇。女子柔道のパイオニアとして活躍し、84年世界選手権52kg級優勝、88年ソウル五輪(公開競技)同級銅メダル。引退後はJOC理事など要職を歴任した。

上山キアヌ久里朱(かみやまキアヌくりす)2001(平13)年1月6日、米ハワイ生まれ。大阪で育ったが、波を求めて中学2年で徳島に移住。ダイナミックなサーフィンを武器に、18年に世界ジュニア選手権(U-18)で優勝。昨年のワールドゲームズに日本代表として出場し、男子団体優勝に貢献した。176センチ。

半井彩弥(なかいあやね)ダンサーネーム:AYANE。1997(平9)年11月26日、北海道生まれ、大阪育ち。フィジカルの強さを生かして国内外の大会で活躍。19年第一回全日本選手権優勝、22年世界選手権6位。弟の重幸(SHIGEKI)は男子のトップ選手としてパリ五輪の出場権を獲得している。153センチ。

太田章(おたあき)1957(昭32)年4月8日、秋田県生まれ。秋田商一早大―東海大大学院。早大教授。16歳でレスリングを始め「重量級のエース」としてボイコットで幻に終わった80年モスクワ大会から4大会連続五輪代表。84年ロサンゼルス、88年ソウルと2大会連続フリースタイル90kg級で銀メダルを獲得した。



——今日はブレイキンとサーフィンから若いお二人をお招きして、柔道の山口香先生とレスリングの太田章先生とともにお話を進めていきたいと思えます。まずは、お二人について、競技を始めたきっかけを教えてください。

AYANE ブレイキンをやっておりますAYANEです。私はもともと水泳を習っていたのですが、そこで親子でダンスというエアロビに近いものをやったのがダンスとの出会いです。6歳の時で、私が

「やりたい」と言ったそうですが、やってみたらすごく楽しかった。ブレイキンは10歳の時、Bボーイ（男子ブレイクダンサー）と交流する機会があつて、ダン

スバトル（互いに踊りを見せあつて競うこと）を見て衝撃を受けたのがきっかけでした。「女の人も、こんなにかっこよく踊れるんだ」って。もともと仮面ライダーが好きな男勝りな性格だったので、パワフルなブレイキンにはまっていきました。

キアヌ 上山キアヌ久里朱です。プロサーフィンをやっています。サーフィンは父がやっていたのがきっかけで、4歳で始めました。生まれたのはハワイですが、育ったのは大阪。大阪にはサーフィンをやる場所がなくて、和歌山とか徳島に連れて行つてもらつて、やっていました。10歳の時に新しい（サーフ）ボードを買ってもらつて、それからどっぶりと浸かっていきました。

——山口先生と太田先生も競技との出会いを教えてくださいいただけますか。

山口 私は6歳の時、テレビドラマの姿三四郎を見て、柔道に憧れて始めました。姿三四郎は強くなるほどに師匠に怒られるんです。強くなると鼻持ちな



AYANEさんはシンポジウム会場の即席ステージでバワフルなブレイキンを披露。喝采を浴びた。

らないようになることがあるんですが、柔道は心と体のバランスを重要だと考える。そこに憧れました。当時は柔道をやっている女の子はほとんどいなくて、世界選手権やオリンピックでメダルを取ろうとかではなく、習い事の一つでした。今日は若いお二人とご一緒できてうれしいです。お父さんとお母さんが付き添いでついてきたような感じですが（笑）。

太田 私は66歳なので、お二人の3倍です。レスリングを始めたのは16歳から。小学校5年から柔道をやっていて、山口先生とは逆ですが、日本一になれるスポーツはないか、日本を代表として世界に行けるスポーツはないかということで、レスリングを始めました。今は大学で、フィットネス。ダンスの一つであるズンバをやっています。

二度と同じ波はこない

——では、若いお二人にブレイキンとサーフィンの魅力についても教えていただきたいと思います。

AYANE 正解がないところですね。先ほど見ていただいたビデオでも、私と相手のダンスのスタイルはまったく違います。相手は立つて踊るのが得意、私はフィジカルの強さを武器に体を支えたり、頭や背中で回ったり、みなさんがブレイクダンスと聞いて思い浮かべるようなスタイルです。オリンピック競技になってスポーツという面が誕生し、点数競技になりましたが、それでもいろいろなスタイルがあって、どれも否定されることがない自由さがブレイキンのカルチャー。たくさんの人にブレイキンを好きになってもらいたいし、魅力に触れてほしいですね。

キアヌ サーフィンは自然を相手にする競技なので、二度と同じ波が来ないのが魅力です。ブレイキンと同じように、それぞれのサーファーに個性とか特徴があつて、スタイルが違います。自分は手足が長いので、外国人のように大きな動きができる。そういうスタイルでやっています。

——ケーキがあつて、いちごもいいし、クリームもおいしい。そんな感じでしょうか。実は今日お二人をお呼びしたのは理由があります。東京オリンピックに関するいろいろな問題が明らかになり、疑問が次々と湧いています。来年のパリ大会を前に、なんだかストリートな気持ちにならない。で、山口先生に相談したら「若者中心のスポーツの選手は何を考えているのか」「オリンピックについて、どういう思いなのか」を聞いてみたいと。で、それぞれのトップ選手でもあるお二人をお呼びしました。AYANEさん、オリンピックについて、どんな思いをお持ちですか。

AYANE 私はトランポリンもやっていたので、オリンピックを目指している人たちは目にしていました。オリンピック競技をやっている人にとつては特別な舞台。柔道とかレスリングとか日本が強い競技では、いつもすごいなあ、かっこいいなという気持ちで見えていました。ただ、私にとつてはテレビで



見るもので、関わりのない世界。もともとブレイキン
はスポーツではなく、どちらかといえば芸術、アート
なので。

キアヌ サーフィンを始めた時は、

オリンピック競技でもなかったし、自分には関係ない世界でした。目指す場所でもなかったですね。サーフィンにはWCT（世界最高峰のプロツアー戦）という大会があつて、目指すのはそこでしたから。もともと、サーフィンは試合というよりもエンターテイメントなんです。相手と戦うことよりも、相手と支え合い、リスペクトし合う。自分も今、世界を回つていて、そういう関係性をすごく感じています。——もともとオリンピックと関係なかったのに、突

然オリンピック競技の仲間入りをした。どう思われましたか。

AYANE 19年にパリ大会の種目候補に入ったんです。これまで関わりがない特別な世界に行けるなら、私も頑張ろうと。誰もが行けるわけではない特別な場所ですから。

キアヌ サーフィンが東京オリンピックの競技に決まったのは16年でした。その後の世界ジュニア選手権で優勝できたので、意識するようになりました。

——過去のオリンピックで思い出に残っていることは、また良いなと思ったシーンや選手などがあれば教えてください。

AYANE 特別に誰が、というのはないのですが、表彰台とか舞台裏とか、競技から離れたところが良いですね。ライバルだった選手たちが国に関係なくハグしたり、たたえ合ったり、そういう姿が印象に残ります。いろいろ見てきましたけれど、私の中では北島（康介）さんの「チョー気持ちいい」は良か

った。速く泳ぐこともすごいけれど、本当に水泳が好きで、全力を出し切った感じ。素敵やなあ、と。印象に残っています。

キアヌ 僕はほとんどサーフィンに集中していて、これまであまりオリンピックも見えていなくて、特に印象に残ったシーンというのもないですね。すみません。

人の変化・環境の変化

——大丈夫ですよ。あと、スケートボードの人に聞いたのですが、公園で滑っていると「やめなさい」と注意され、学校では「勉強しなさい」と怒られたのが、オリンピック競技になったとたんに「もつとやっていいよ」「頑張つて」と手の平返しされた。そういう経験はありますか

AYANE 私がブレイキンを始めたころは、今のよう環境も整っていないくて、駅とか町の施設とかで営業後に真つ暗になったところでやるが多か

った。私たちのマナーの問題もあるのでしょうか「邪魔だ」とか「やめろ」とか。汚い床でごろごろ転がって、不良のダンスみたいなイメージはありました。それが、最近は「テレビで見ているわ」とか「応援しているわ」とか。今まで見向きもされなかったのに、今は声をかけて応援してもらえる。ダンススタジオも増えて、ずいぶん環境も急によくなりました。

キアヌ 毎日サーフィンをやっていると、髪の毛が潮焼けになってしまつて。小学校の時には、周りから「お前、染めているだろ」つて言われるのが嫌でした。ナチュラルですけど。当時はサーフィンばかりやっていると、いいイメージがなかったけれど、今は変わりました。頑張つてください、つて言われますから。

——小さい時つて、そういう言葉にムツとすることもあったのでは。

AYANE 自分は練習させてもらつていてという



ちはありました。

——山口先生、二人の話をお聞きになっていかがですか。手の平返し。

山口 ちょっとと女性スポーツにかぶるようなところもありますね。私も柔道を始めた当時は「女だてらに」とか「女のくせに」とか言われてきました。80年代に入ってオリンピックに女性のスポーツが進出したとたんに、急に変わりましたね。それまで「女に強化費はいらない」とか言っていた方が「一緒に

思いが強かったです。マナーは守っているつもりだし、迷惑をかけたつもりもありません。ただ、そう思われていいるなら、自分がそれを変えたいという気持ち

頑張ろう。メダルも一緒に数えよう」って。手の平返しですよ。ただ、問題だと思うのは出たり入ったりすることですね。

——ブレイキンが28年のロサンゼルスオリンピックは競技から外れました。

山口 ブレイキンなど新しいスポーツは、もともと個々でスポンサーもつくし、強化費に頼らない部分がある。システムというよりは、仲間同士で成長できる競技ですから。ただ、ソフトボールなどは大変。自分たちは何も変わらないのに、オリンピックによって周りから持ち上げられたり、下げられるのも早い。やっぱりオリンピックは特別な大会だなと。それがいいのか、悪いのか。太田先生どうでしょう。

太田 レスリングも東京大会の前に外されそうになったんです。紀元前からやっているんですが、視聴率がとれない、観客が入らないと言われて。オリンピックから外れると、注目もされなくなる。吉田沙保里もテレビに出られなくなった。オリンピックが



あるかないかは、競技にとつてすごく大きな問題ですね。

——実施する競技が出たり入ったりすることについては。

太田 レスリングは女子が入ってよかったですよ。男子がメダルとれなくなつたときに、吉田沙保里や伊調馨が頑張ってくれましたから。ただ、巨大化は問題ですね。経費の面でも。私はオリンピックを4つに分けませんか、つて言っているんです。格闘技

の年、球技の年と4つに分けて毎年開催する。選手にとつては4年に1回だけど、見る方にとつては毎年ある。開閉会式すべての競技の選手が一堂に会することなくなるので少し

感動は薄れるかもしれませんが、本来のオリンピックとは違うかもしれませんが、経費的にはいいかと。

——東京オリンピックの前に、開催に反対する声が70%ありました。開催後は「やってよかった」が過半数。ただ、1年たつてお金の問題など闇の部分が出てきて、スポーツが汚されたなど。五輪の良さではなく、さえない部分も見えてきた。若いお二人にどう映っていますか。

キアヌ そういう話は聞くけれど、僕はサーフィンに集中していて、あまり気にはなりませんでした。目の前のことで一生懸命だったので。

AYANE 細かいところまでは考えられないし、分からないけれど、残念ではありますね。感動が見えるのはいいけれど、同じくらい闇の部分が見えるのは残念だと思います。

——ロシアとウクライナや、中東の問題、ずいぶんと地球上で戦闘状態が増えました。そんな背景の中で世界平和をうたうオリンピックが行われることに

ついでには、どう思われますか。

AYANE オリンピックを見て政治も考え直してほしいなと思うけれど、自分が平和なところで育っているから言えることですね。ブレイキンって実はロシアも強くて、いいダンサーがいるのも知っています。彼らが出てくれば、もっとシーンも上がるだろうと。無責任になるけれど、ロシア人だからといって出られないのは、もどかしいと思います。もちろん、そういうテンションの話じゃないのは分かっています。

勝利以外の価値

山口 平和の良さを世界に示していくというオリンピックの役割は変わらない。そうあり続けてほしいし、常に世界に発信し、伝わっているかは考えなければいけない。IOCはお金のことも考えて新しいスポーツを入れた。スポンサーが付くぞ、レッドブルは間違いないぞみたいなの。でも、IOCの意図し

ないところで、新しいスポーツを入れたことでオリンピックが良い方向に向かっているんじゃないかと思うんです。ブレイキンは細かい採点とか気にしない。選手も文句を言わない感じ。自分とは違うけれど、相手の演技も良かったと思える。サーフィンも似たところがあって、VARを使って細かく採点してというのとは違う。キアヌさんも自分の方が勝っていると思っても、点数は相手の方が上だったという経験ありませんか。

キアヌ 確かに、勝ったと思っても負けることはあります。でも、それもジャッジが付ける点数なので、仕方ない。それもありがた。

山口 そんなんです。今、スポーツは余裕がなくなっている。私はマラドーナの神の手もいいんじゃないかと思うんです。それはそれで、長い歴史の中ではいろいろある。波も一緒。いろいろなことを飲み込んで、頑張っていることに意味がある。テクノロジーマッチで、勝ち負けだけになつてくると、見てい

る人は興ざめしてくる。新しいスポーツは違う。勝ち負けだけではなく楽しむ。スポーツ本来のいい面です。スタイルや考えは違っても、相手をリスベクトする。IOCは儲かればいいと思つて新しいスポーツを入れたけれど、意図せずスポーツ本来のいい面を見せてくれることになった。話は少し飛びますが、それつて世界平和にも繋がると思ふんですね。——なるほど。会場に来て下さっているスポーツ文化評論家の玉木正之さんは、ウクライナでオリンピックをやればいいと言つていましたか……

玉木 オリンピックは今、開催しようという都市がなくなつてきていて困つています。元IOC職員の前日良一さんがウクライナでやればいいと言ひ出した。私は大賛成。オリンピックが肥大化や商業化で批判が集まるなら、理念の平和運動に戻つてウクライナ開催で停戦を訴えればいい。IOCの資金力から開催は可能だという。ソウルが2036年大会を開催したいらしく、ピョンヤンとの共同開催という

話も出ているらしい。IOCの中にも賛成する人がいて、五輪の現状を憂えている人も少なくないらしいです。今こそ、理想論を唱えるべきで。理念や理想論を主張しないと。オリンピックもスポーツも、どんどんおかしくなつてきている。新しいスポーツには現状に刺激を与えてほしいですね。

挑戦とリスベクト

——ブレイキンはやねさんの弟さんのSHIGEKIXさんがアジア大会優勝でパリオリンピック出場を決めました。AYANEさんは女子の2枠を目指すと思います。サーフィン男子が2人決まつて残り1人。キアヌさんの狙いは次のオリンピックになりますか。

キアヌ 28年はロサンゼルスでオリンピックがあります。まだ会場は決まつていないんです。(世界ジュニア選手権で優勝した)ハンティントン・ビーチになるかもしれないので、これから5年間は主に

そこで練習したいと思っております。

——最後に、これは言っておきたいというのがありました。あつ、吉田さん、どうぞ。

吉田 キアヌのマネージメントをしております吉田信之です。本日は、お招きいただきまして、ありがとうございます。本日は、お招きいただきまして、ありがとうございます。こういう場にサーフィン競技が呼ばれることがうれしくて、楽しみにさせていただきました。ブレイキンと同じくサーフィンもストーリーが発祥で、勝ち負けをつけるというよりも新しいことに挑戦することが価値を生むカルチャーです。点数を付けるというのの後からできたことで、選手同士のリスペクト、互いにたたえ合うというのが根底にあるスポーツです。

マネージメントの話を見せていただくと、私は2015年からサーフィンに関わりましたが、オリンピック競技になっていぶん環境は変わりました。スポンサーになつてくれるクライアントの金額の0が1つ2つ平気で違うんです。以前は年間100万

円出してくれるスポンサーなどなかった。ブレイキンもそうかもしれないですが、サーフィンこそ不良の遊びだと思われていた。営業に行つても、不良の集まりだろうとか、海を汚しているのはお前らだとか。ところが、最近はビーチクリーンなどの活動も評価され、ごみを捨てないことも分かつてもらえました。オリンピックの持つ力をすごく感じています。オリンピックがあるおかげで、マイナースポーツでも自分の名前をあげたり、夢をつかめたりする。それが、これまで日本が育んできたオリンピックのカルチャーかなと思うんです。オリンピックには、感謝と可能性を感じています。本日は、本当にありがとうございました。

——素晴らしいまとめのご意見でした。若いお二人の今後の活躍にも期待し、新しいスポーツの方々から、今後也大いに刺激をいただきたいです。

(本稿は2023年10月15日、東京・新宿区早稲田大学戸山キャンパスで行われた「第126回スポーツを語り合う会」のシンポジウムをもとに構成したものです)

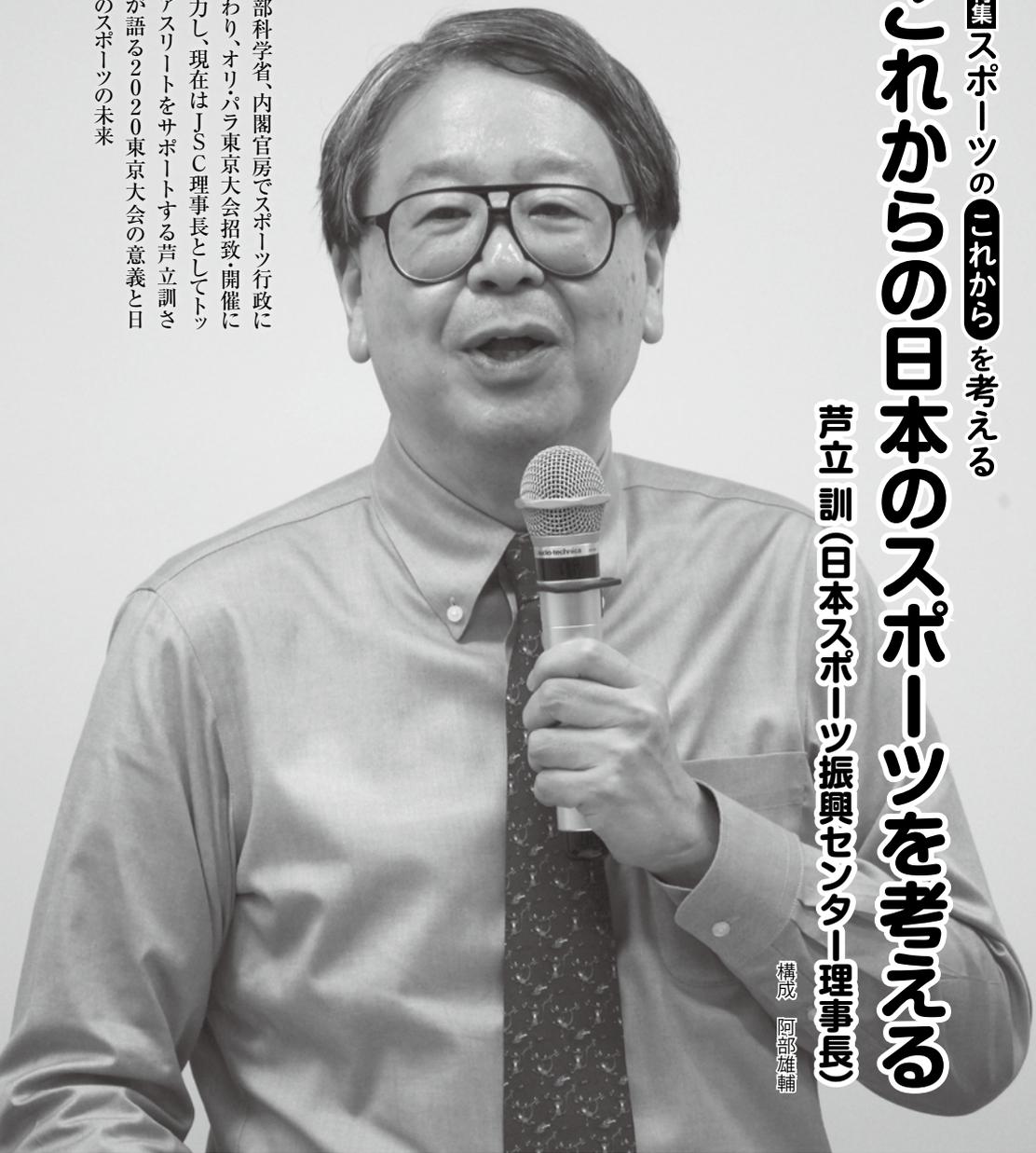
特集 スポーツのこれからを考える

これからの日本のスポーツを考える

芦立訓（日本スポーツ振興センター理事長）

構成 阿部雄輔

文部科学省、内閣官房でスポーツ行政に携わり、オリパラ東京大会招致・開催に尽力し、現在はJSC理事長としてトップアスリートをサポートする芦立訓さんが語る2020東京大会の意義と日本のスポーツの未来



芦立訓（あしだて・さとし）1960（昭35）年10月7日、宮城県生まれ。85（昭60）年、上智大学法学部法律学科を卒業し、文部省（現・文部科学省）に入省。2008（平20）年より同省スポーツ・青少年局スポーツ課長としてオリンピック・パラリンピック東京大会招致に携わる。13（平25）年の招致決定後、14（平26）年より内閣官房で政府のオリパラ推進事業の総合調整にあたる。18（平30）年、文部科学審議官を拝命。20（令2）年、同省を依願退官。21（令3）年、公募に応じて独立行政法人日本スポーツ振興センター理事長に就任。22（令5）年、早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士課程修了。

私は2008年から国のスポーツ行政に携わるようになりました。当時は2016年に東京でオリンピック・パラリンピックを開くための招致活動をしている時代でした。その後2009年のIOC総会で負けて、2011年に石原都知事がもう一度オリンピック招致を掲げて再選を果たし、2013年、ブエノスアイレスのIOC総会で2020東京大会招致が決まりました。招致が決まってもまずわれわれが取り組んだのは、鉄道の駅やホテルのバリアフリーの問題でした。

メインスタジアム国立競技場の最寄駅であるJRの千駄ヶ谷駅がバリアフリーになっていなかったり、地下鉄銀座線の外苑前駅もホームが狭くてホームドアもありませんでした。当時鉄道事業者さんから聞いたところによると、ホームドアというのは非常に重くて、単にホームドアを付けなければならないのではない。ホームから強化していかなければならぬいから、むちゃくちゃお金がかかるということだっ

たんですが、鉄道事業者の協力を得て少しずつ進めていく間に、徐々に軽いホームドアができるようになりしました。こういうこともオリ・パラでホームドアを付けようとしたことが、今日少しは役に立っているのかなと感じるところでございます。

バリアフリー化改修工事に補助金が付いた

ホテルについてはバスルームが一番大きな課題でした。車椅子の方はアスリートも含めて、他人の力を借りずにご自分でシャワーを浴びたい方がたくさんいらっしゃいます。車椅子自体も基本的には防水仕様で、そのままシャワーを浴びても大丈夫です。ところが日本のホテルはほとんどのホテルにぜんぶバスタブが付いているんですね。オリ・パラの準備をしていた頃は、1つ星から5つ星まで東京にはバスタブのないホテルはほとんどありませんでした。車椅子で来られたお客様が自分の力だけではシャワーを浴びられないんです。

対策として2019年にホテルを改修するための補助金を設けました。補助金つて民間の事業者には普通出さないんです。それを観光庁に頼んで補助金を付けていただいたんですが、あまり受け入れられませんでした。ホテル関係者に聞きましたところ、当時はバリアフリーにしている客室はお客様に人気がなく、最後まで売れ残るんだということでした。本格的にバリアフリーに改修していただいたのは大磯プリンスホテルだけと記憶しています。

一方で海外の例を調べた時に、ドイツには全室バリアフリーにしているホテルチェーンがあることを知りました。こういう気づきがあっただけでも東京大会の仕事をしていて良かったなあと感じているところがあります。

ところが東京大会についてはその後、汚職や談合というような事件が発覚して、金儲けのためのイベントだったんじゃないか、広告代理店などが儲けるイベントだったんじゃないかと、そういう話に上書

きされてしまった部分があるわけです。もちろん反省すべきところはたくさんあると私は思うんですけども、一方で折角やったこのイベントをさらに引き続きスポーツの発展に役立てていくにはどうしていったらよいか、どうすべきなのかと考えますと、やはり立ち返るべきところは「スポーツ基本法」ではないかと思えます。

「スポーツ基本法」が東京2020のレガシー

「スポーツ基本法」は2011年6月に公布、8月に施行されましたが、生まれたきっかけは政策的必要性ということだけではありませんでした。

本格的に日本でオリンピック・パラリンピックを開催しようという機運が出てきた後、IOC総会で東京を支持してもらうために何が必要かという議論が行われてきた中で、体系的な法律を持つことが大事ではないかという意見が出てきた。つまり投票権を持つ人たちにネガティブに見られないためという

のがきつかけだつたのかもしれませんけれども、結果として、体系的に、グローバルな観点で大切だと思われることについて、研究者も含めて多くの方が議論に参加したかたちで、超党派の議論の中で生まれた「スポーツ基本法」は、私は非常に大きな意味があるのではないかなと思います。

日本の法律の大半は内閣提出の法案ですが、「スポーツ基本法」は議員立法です。超党派の議論を経て多くの皆さんのコンセンサスを得ながらつくられた法律ということですが、制定されていく過程において行われたいろんな議論が収斂しゅううれんされたかたちになっています。おおよそ日本のスポーツ界においてコンセンサスを得られている事項が網羅的に盛り込まれている法律が「スポーツ基本法」で、そこに書いてあることをどう具現化していくのか。「スポーツ基本法」により一層磨きをかけて魂を込めていくという作業が何よりも大事なのではないかと思っっている次第であります。

スポーツ界には常にさまざまな課題があります。その課題を何かよく分らないまま触っていくのではなく、少しでも体系的に、あるいは地図を見ながら取り組んでいこうと考えた時に、網羅的、体系的に国民的コンセンサスを得た法律である「スポーツ基本法」を常に振り返り立ち返りながらスポーツのあり方、スポーツの政策を考えていく。そのことが実は東京大会の大きなレガシーのひとつ、法律がレガシーと言うよりはこの法律に基づいて、さらなるスポーツの発展を考える手がかりとしてこれを大切にしていくことが、非常に大事なことなのではないかなと思っっているところであります。

デフリンピックとスペシャルオリンピックス

ポスト東京2020の課題の中でいくつかポイントを挙げるとするならば、パラリンピックをやった国として、もつと障碍がい者スポーツに取り組まなければならぬのではないかと。パラリンピックが障碍者

スポーツの右代表であることは間違いありませんが、それ以外にたとえば東京都が2025年に開催する予定のデフリンピック、あるいは知的障害の方々のスペシャルオリンピックス。こういうものをどう考えていくか。個人の理解では、まずは東京でパラリンピックを成功させる。障害者スポーツ全体の底上げというよりは一点突破型でパラリンピックの振興を進めていくということで今日まで来たけれど、今後はパラにとどまらず、デフとかスペシャルなども含めての障害者スポーツのあり方が問われることになるわけです。

それからトップスポーツと、グラスルーツスポーツと言うんでしょうか、生涯スポーツとをどう好循環させていくかということが「スポーツ基本法」を制定する議論の中で言われていた大きな課題だと考えますと、たとえば障害者スポーツと病院におけるリハビリテーションとのリンクというようなことも考えていかなければならないのではないのでしょうか。

トップアスリート支援で得た知見を一般に

文部科学省では私自身、生涯学習と言いますか、生涯にわたって勉強することが大事だという旗振りをしておりましたので、2020年に文部科学省を退職した後、旗を振った責任を取ろうと一念発起いたしました。この早稲田大学の大学院スポーツ科学研究科に入って勉強をしました。2021年1月、公募に応じて現在も働いている日本スポーツ振興センター（JSC）に入りました。実際に東京大会が行われた時にはすでに国家公務員ではなく、日本スポーツ振興センターにいたわけであります。

JSCはトップアスリートのサポートがメインのミッションですが、私自身はJSCがトップアスリートを支えるために培ってきた知見をいかに地域の皆さんにご利用いただけるようにするかということが、これからの大きな課題だと思っています。

たとえば今、トップアスリートの皆さんにはスポ

スポーツ医学とそのサービスの提供を受けるために東京都北区西が丘のHPSC（ハイパフォーマンススポーツセンター）にいらしていただいています。アスリートファーストということからすれば、西が丘へ来いというのは違うんじゃないか。本来は自宅へ行く、デリバリーサービスをすべきかもしれませんが、西が丘のスタッフの数に限りがある中で、ぜひ出前で行きますとはいかないわけです。

じゃあどうするのかという時に、テクノロジーというものを考えていく。たとえばスマホにアプリをダウンロードして、そのアプリを活用することによって海外にいても測定ができる、サポートを受けられるようにできないだろうか。さらに何年先かは分かりませんが、一般の方々もスマホのアプリを使ってスポーツ医学のサービスにアクセスできるようにすれば、納税者からお金をいただいてトックススポーツのために開発し、蓄積したノウハウを、ようやく納税者にお返しできると思うんです。

アスリートのセカンドキャリアにチャンスあり

あるいはトップアスリートのセカンドキャリアについて。日本中の大学、公私立大学、短期大学や専門職大学まで含めれば1000ぐらいでしょうか。そこにトップアスリート経験者をプラスワンで雇用してもらおうようなことができないか。私は文部科学省で私立大学を担当したことがあって、大学の経営者をいくらか存じ上げているんですが、生き残りを懸けて皆さん必死なので、良い話があれば、良い話っていうのは著名人とかそういうことじゃなくて指導者として優れているという意味ですが、うちの大学の看板になるかもしれないから雇いたいというふうなお話も伺っています。

私ども日本スポーツ振興センターは「スポーツ振興基金」という基金をお出ししています。その中にアスリートでリタイアされた方を中心に、NF（国内競技団体）から推薦されて勉強するのであれば授

業料を負担するというメニューがあります。日本学生支援機構の奨学金は、利子つけて返してくださいという奨学金が中心になるわけですが、私どもの「スポーツ振興基金」の奨学金は渡しきりの給付金でありますので、返還義務はございません。しかし残念ながら毎年ぜんぶは手が拳がらない状況です。

私が今まで仕事の上で接した多くのトップアスリートの皆さんは、失礼な言い方をすれば、ご本人が思っているよりはるかに地頭が良い。素晴らしくセルフコントロールができています。ところが赤羽のホルモン屋でホッピー飲みながら話してみると、だいたい自己否定なんです。『ずっと運動ばかりやって、脳みそ筋肉なんです』みたいなことを言う人が多いわけです。

絶好のチャンスだと思えます。AIが出てきたり、今までのような学習法はちよつと見直さないとね、みたいな時代になってきているわけです。宿題だってAIに言ったらちゃんと書けるって私の子供

が得意げに言ってますよ。チャットGTPに細かく指示するとりポートすぐできちゃうんだと。そういう時代、地頭の良さは決定的に大事です。それまでの学習プロセスがどうだというより今対応できる地頭が価値を持つてくるとすれば、それこそスポーツの中で磨き上げてきた能力を発揮できる絶好のチャンスじゃないでしょうか。

世界のIFが目撃した「eスポーツウィーク」

もうひとつ考えなければならぬ問題に、eスポーツがあるかと思えます。今年6月にシンガポールでIOC主催の「オリンピックeスポーツウィーク」が開催されました。ショッピングセンターの一角が会場で、薄暗い中ピカピカ光っていて、いろんな音がするという感じで、久々に新橋のゲーセンを思い出しました。IF（国際競技団体）のプレジデントが大勢来ていて、相当前のめりになっているIFも少なからず見受けられました。

eスポーツの、世代を超えて楽しむことができるという視点、あるいは障碍の有無を超えてひとつのルールで競えることをどう評価すべきなのか。それからフィジカルな要素を多く入れて、世界中の人と記録を競うというコンセプトのものをどう考えていくか。たとえばローイングのようなものは、本当にマシンを漕ぐわけです。漕いでインターネットでみんなでつないで、一定のルールで優劣を競ってみんな汗だくになる。これもeスポーツです。

今多くのIFは自分たちの種目から人が減っているという危機意識を強く持っています。その集合体たるIOCは、10年以上前から若者のスポーツ離れに真剣に取り組んでいます。最初の取り組みは2010年にシンガポールで開かれた「ユースオリピックゲームス」でした。

勝敗を競うより教育的機能や国際親善、友情の醸成というようなものに力点を置いて行われた「ユースオリピック」ですが、これだけではスポーツ離

れを食い止められないという中で、次にIOCが手を打ってきたのが「アーバンスポーツ」の導入です。これが結実したのが2020東京大会で、スケートボードやスポーツクライミングが入ってきた。そこをもう一步踏み出そうというのがeスポーツなのかという感じがいたします。

スポーツは太陽の下で汗かいて筋肉を使っている考え方からすれば、eスポーツに拒絶反応を示す方も当然いると思います。けれど、何か地殻変動が起きる可能性はある。見たくないものを見ていないといった間にかおいてきぼりを食っちゃう可能性があるということですよ。

いろんな意見があることも事実です。その証拠に、トーマス・バッハIOC会長がシンガポールに來れる予定だったところ急遽キャンセルになりました。つまりまだせめぎ合いは続いているということ、まだ目をつぶっていてもいい時間かもしれません。けれどもシンガポールでうごめいているIFの関係

者をこの目で見た私個人の認識からいたしますと、そろそろこの問題に光も影も含めて向き合うべき時期に来ているような感じがいたします。

多様な課題に多元的、分散型で対応する時代へ

基本法の下にいろんな関係する法律がぶら下がるのが普通の法体系だとすれば、「スポーツ基本法」と東京大会前に制定された「ドーピング防止活動推進法」しかない現状はまだ道半ばです。たとえばスポーツインテグリティの大切さ、スポハラみたいなものも含めてどうアスリートの権利を保障するかみたいなことを法律化するのとかどうか。その前にSNSなどからどうアスリートを守っていくのかということも大きな課題だと思いますし、さらに今ジャニーズ事務所の性加害の問題が言われていますが、こういういった問題はスポーツ界でも起きています。

課題はたくさんあります。ひとりの人間、ひとつの組織がすべて対応するのではなく、ディセントラ

イズって言うんでしょうか、多面的、多様にいろんなところが機能することがこれからの時代、大事ではないでしょうか。国がぜんぶ決めるとかJOCがぜんぶ決めるのではなく、いろんなところで多元的、分散型で決めていくことが求められるのだと思います。

そういう意味でもスポーツの世界で経験を積まれた方々、研究者の方々への期待も大きいのです。日本のスポーツの発展のためにより多くの方々に役割を果たしていただくことが「スポーツ基本法」制定の主旨に叶うことでもありますし、さらに言えば、制定のきっかけとなった東京大会をやって良かったと皆さんに思っていたくようにスポーツ界が改革されることを、私としては強く望んでいるところでもあります。

(本稿は2023年9月20日、東京・新宿区早稲田大学戸山キャンパスで行われた「第125回スポーツを語り合う会」の講演をもとに構成したものです)

「走」第8回



好きこそものの上手なれ。

「走るプロ」は「走ること」が大好き！

玉木正之

日本で初めて、F1グランプリのパイロット（ドライバー）として大活躍された中嶋悟さんを、シンポジウムのゲストに招いたときのことだった。

私が、「肩書きはどのように紹介しましょうか？」と尋ねると、中嶋さんはこう答えられた。「運転手でいいですよ」

私が少々呆気にとられて返事をできずにいると、中嶋さんは続けて「解説」を加えてくれた。「僕は昔から、いろんな自動車を運転することが、大好きだったですからね」

なおも私は、キツネにつままれたような気



分で返事をできないでいた。時速300キロを超える超高速でレーシングカーを操ったF1のパイロットが、自分のことを「運転手」と称したことを即座に納得することは不可能だった。もちろんシンポジウムの席で、聴衆に向かつて「自動車運転手の中嶋悟さん……」と紹介するのも気が引けた。

「別におかしくないですよ。世の中には自動車溢れていて、運転する人も沢山います。が、自動車の運転が好きな人は少なく、多くの人にはラジオを聞いたり音楽を聴いたり、同乗者と会話したり……です。僕は自動車を走らせることそのものが大好きで、楽しんでるから運転手なんですよ」

ナルホド！ と納得。自動車の運転手も、マラソンのランナーも100m走者も、みんな走ることにそのものが好きなのだ。

好きこそ上手。そんな人のことをプロの走者、プロの運転手と呼ぶのですね。シンポジウムも、この話で大いに盛りあげられました。

夢劇場『馬』

No.33



至福のとき

長田渚左

或るベテラン騎手に「心から酔えるような会心のレースは何回くらいありますか?」と聞いた。

「うーん、そうだなあ(長い沈黙) 10回はないと思う。9回ぐらいかな」

エーッ、何万回もレースで騎乗し、何千回も勝利しているというのに、会心のレースが10回にも満たないとはどういうことなのか!?

「エエッ、少なすぎませんか?」

目を丸くしたままの私に彼は、こう言った。

「馬が驚くほど上手にレースを勝手にしてくれて、俺は何もしていないで勝ちちゃうこともある。道中は思い通りにならないのに、結果的には勝利することももある。考えて考え抜いてレースに臨んでも次々波乱が起きて、いやあ勝つには勝つたが……何だか不明の勝ちもある(笑い)。レース中に前後左右の馬の動向が千里眼のように感じられ

て、自分の馬と自分がびったり呼吸が合い、寸分の狂いもなく仕掛けてドンピシャの勝利は、そうはないな」

2023年の菊花賞で、クリストフ・ルメール騎手が操ったドウレッツァが圧勝した。大外17番からまず先頭に立った。押して進撃し、その後は馬を落ち着かせるポジジョンで進行。2周目、2コーナーからの向正面で他馬に慌てず、どうぞ!と先頭を譲った。一息入れたドウレッツァはラストの直線で悠々と最速スピードにギアを上げた。3馬身差の勝利。

京都競馬場の観戦者から「ウメエーなルメール」と声が飛んだが、私はレース後の彼に目を奪われた。

注がれる万人の目を気にせず、バーバラ夫人と熱いキスを交わし続けたのだ。あれは、きつと会心のレースの裏付けだったに違いない……。



バックナンバーのご案内

バックナンバーを、直接お申し込みいただけます。ご希望の号と冊数を明記し、送料分の切手を左記にお送りください。

〒352-0011
埼玉県新座市野火止8-16-32
株式会社東美物流
『スポーツゴジラ』係

送料値上がりのため45号より変更しました。

10冊まで 送料 400円

20冊まで 送料 700円

40冊まで 送料1200円

※特集の内容は本誌巻末カラーページとホームページに記載しています。

【ホームページ】

<http://sportsnetworkjapan.com/>

★お申し込みいただくとき『スポーツゴジラ』への感想もお書き添えいただけると幸いです。

次の春号第62号は2024年3月

初旬刊行を予定しています。

また、バックナンバーは品切表示の号も左記の図書館でお読みになれます。ご利用ください。

●世田谷区八幡山・大宅壮一文庫
●世田谷区深沢・日体大世田谷キャンパス図書館

●港区広尾・東京都立中央図書館

●千代田区永田町・国立国会図書館

●港区芝・東京都人権プラザ図書館

●新宿区霞ヶ丘・日本スポーツ協会資料室

【理事】

五十嵐二葉（弁護士）／池井優（慶應義塾大学名誉教授）／伊藤順蔵（早稲田大学名誉教授）

／岡田匡令（淑徳大学名誉教授）／長田渚左（ノンフィクション作家）／笠原一也（日本オリピック・アカデミー名誉会長）／菊幸一（筑波大学教授）／佐久間昇二（びあ株式会社取締役）／重村一（㈱ニッポン放送取締役相談役）

／永井憲一（法政大学名誉教授）／山口香（筑波大学教授）／山口良治（京都工学院高校ラグビー部総監督）

【事務局】

〒359-1192

埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15

早稲田大学スポーツ科学部太田章研究室気付

皆様、ご存じですか？

スポーツゴジラは年4回春・夏・秋・冬の季刊で発行。

都営地下鉄・大江戸線・浅草線・三田線・新宿線の各駅、全国の大学102カ所に設置されています。

スポーツゴジラ®

2023年12月11日発行

第1巻第61号

無断転載・転売を禁じます

企画編集 スポーツネットワークジャパン

長田渚左・阿部雄輔・首藤正徳

波多野圭吾・西本祥子・江川卓実

山内亮治・鈴木希人

制作 有限会社ナトリック

印刷・製本 株式会社美松堂

発行 スポーツネットワークジャパン

お問い合わせは左記まで

特定非営利活動法人

スポーツネットワークジャパン

〒168-0063

杉並区和泉1-40-13-401